

特集：書評コロキウム 指紋管理技術の帝国間連鎖とそのアクチュアリティ —高野麻子著『指紋と近代』をめぐって—

李 孝徳

LEE HYODUK

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.20 (2018), p.7.

本特集は、2017年3月4日に東京外国語大学・海外事情研究所で開催された「書評コロキウム 指紋管理技術の帝国間連鎖とそのアクチュアリティ—高野麻子著『指紋と近代』(みすず書房、2016年)をめぐって—」での討議をもとに、コメントとリプライをあわせて掲載するものである。当日に書評者として発言した板垣竜太氏、土井智義氏、高榮蘭氏にコメント原稿をあらためて書いていただき、高野氏にはそれを受けてリプライというかたちで原稿を寄稿していただいた。

今回の書評コロキウムは、科研費共同研究「批判的地域主義に向けた地域研究のダイアレクティック」(代表：小川英文)と「琉球政府の政治的主体性をめぐる戦後沖縄政治社会史の再構築」(代表：戸邊秀明氏)、東京外国語大学・海外事情研究所の共催による企画である。近現代東アジアの人の移動とそれを管理する力のせめぎあいを捉え、帝国主義の国際的連関や植民地主義の転位の諸相を解明する新たな視野を開くべく、本書の合評会を通じて、帝国の力が重ね書きされた場所としての東アジアの現在の歴史的な位置を捉え返すことを試みたものである。

本書で取り組まれているのは、現在、「生体認証技術」と総称され、あらゆる身体的特徴を利用した個人認証技術の嚆矢といってよい指紋による個人識別方法の史的変遷と統治技術としての権力作用の意味である。終生不変の指紋によって個人を識別する「指紋法」という技術は、19世紀末のイギリスの植民地インドで被植民地人労働者の管理技術として実用化されると、ヨーロッパ諸国とそ

れらの植民地、そして日本を經由して「満洲国」に伝わった。犯罪者や移民などの管理を逃れて移動しようとする人びとを常に把握・管理下に置く統治技法としての有用性が国家や植民地統治者に認知されたからである。そしてこの指紋法は、領土内の全住民を完全管理しようとする「夢」につながり、国民国家の形成・再編の局面で繰り返され試みられることになる。日本でも、在日台湾人・朝鮮人などの(旧)被植民地人をはじめとする「外国人」の管理だけでなく、愛知県民指紋登録のように1950年ごろから約20年間にわたって続けられた例がある。本書の独自性は、こうした指紋法を現在の生体認証技術にまでつながる近代的統治における社会工学としての身体管理という観点から考察した点にあらう。

今回の書評コロキウムでは、本書を通じて、それぞれが関心を持つ具体的な文脈から、帝国の力が重ね書きされた場所としての東アジアの現在を歴史的に捉え返すことが試みられた。多くの示唆に富んだ刺激的なコメントを寄せていただいた板垣氏、土井氏、高氏、そして、その問いかけを真摯に受けとめてリプライを書いてくださった高野氏に感謝したい。

